

基礎生物学研究所生い立ちの記

桑原万寿太郎

(基礎生物学研究所元所長)

われわれの悲願が適って、遂に岡崎の丘の上に基生研が立つことになり、思いがけずも私が初代所長の重責を負わされてからもう10年たった。基生研の設立までには長い長い準備の歳月があった。最初には、研究の自由を守るためには、いくつかの研究所を、いくつかの大学に附置させて、それを互いに連けいさせるという構想もあったのであるが、それでは大型の設備の建設やその他いろいろの点で不都合があるので、結局のところ今日の形に近い構想へと変っていった。私にとっては、大げさにいえば日本の基礎生物学の擁護をひたすらに願って、かわりつづけた基生研の10周年のお祝いは、まさに20年のお祝いのような気がする。岡崎の名鉄の駅におり立って、緑にはえる、美しい煉瓦色の基生研城を眺めると、基生研設立準備委員会の林孝三（当時東京教育大）と秋田康一（当時東大）のお二人とはじめて此処を見に来た時の事が思い出されて、感無量なのである。

あの時は国鉄の岡崎駅へ行ってしまったので大まわりをしてやっと旧愛知教育大の跡地にたどりついた。草深い丘の上に移転あとのくずれかけた校舎の残骸がさらされていた。

私にとっては基生研は生きものみたいである。難産の末、草深い荒野に呱呱の声をあげ、ヨチヨチ歩きをはじめたのが、やがてスクスクと育ってたくましい青年になった感じである。

今基生研10年にあたって思い出を綴れということである。沢山の思い出はあるけれど、生れ出ずる悩みを語ろうと思うと容易ではない。何分にも私は九大の教授であったのだから、基生研作りの会議といっても到底全部は出られなかったし、ワーキング・グループには加わらなかったのが資料が不充分である。九大を退官して上智大学に移ってからやっと在京グループになったのである。

資料を完璧にするいとまもないまま、私はほっておけば歴史にも残らない、研究所誕生の息吹を出来るだけ客観的に書き残しておきたいと思うのである。

ふり返ってみると、国立の基礎生物学研究所を作りたいという機運は、昭和30年のはじめ頃から既にあったと思う。昭和の何年だったかわすれたが、日本動物学会の大会が名古屋大で行われた時、当時名大教授であられた佐藤忠雄先生が私共（その時集められたメンバーの記録はないが）を集めてハッパをかけられたのを思い出すのである。敗戦のみじめさから立ち上ろうとして、追いつけ追いつけ越せムードの中で、産業に直結し易い科学部門ばかりが大切にされて、人間にとってもっとも大切な生命現象などの研究はないがしろにされ、まことに粗末な扱いをされているのは、何とも残念なことで、大学における教育もふくめて、基礎的な生物学研究の抜本的推進をはかることがわれわれの義務ではないかというお話しで、われわれの発奮をうながされたのである。此の事は、私共も皆切実に感じて

いたことであったのだから、かなりのショックをうけたのである。戦後の学制の改革などは既にはじまっていたのではあるが、生物学は当時大学では動物学、植物学といったようになっているところが多く、古典的な姿をとどめがちで、生物学科などにくる学生もへってしまって、われわれにとってはまことに淋しい時代がつづいていた。

それとは別に世界の大勢とはいえば、生命現象の基礎的研究は代謝、興ふん、遺伝などあらゆる面で画期的な進歩がはじまり、20世紀後半は物理学ではなしに生物学の時代だとまで予感されるくらいであった。日本からは優秀な若い人材がどんどん豊かなアメリカあたりに進出して業績を挙げはじめ、いわゆる頭脳の流出が、特に此の分野でははげしくあらわれていたのである。これはゆゆしき問題であることを私共も痛感せざるを得なかった。

学術会議の中においても、原子核の研究などが重視されて、巨大な研究機構が形成されてくる現状の中で、生物学に限らず、自然科学の基礎研究の広い部分がはげしい抑圧をうけつづけかねないという情勢が見えてきているという危惧が強まっていたのである。

当時学術会議の中にはこうした現象に対応するため、バランスのとれた研究体制の実現をめざして、長期計画調査委員会というものがあるが、その委員会が、各研究連絡委員会にその将来計画の検討と、報告の提出を求めたのである。そして基礎生物学に関しては、それは生物科学研究連絡委員会に依頼されたわけであるが、この生物科学研連というのは細分化された動物学研連とか植物学研連とか遺伝学研連とかの各委員長の形成する会であったので、生物科学将来計画小委員会（委員長は二国二郎氏、二国委員会といわれた）を構成し、39年には学術会議の生物科学連絡委員会の名において、基礎生物学研究将来計画の第二次案というものが出された（委員長宮地伝三郎氏）。それを見ると、研究所の設立が強く要望され、その主要な任務というのは、大学その他で作り出された研究の萌芽を急速に開花結実させることによって人類の向上発展のために有形、無形の寄与をするということであり、大学とこれら研究所との均衡が大切であるとされている。そしてこの段階においては、大型のバイオトロノと自然博物館の併置も考えられていた。

そのような見地に立脚して、われわれは次のような6部21部門から成る生物学研究所（仮称）を構想し、それぞれの部門内容等も加え、更に「生物科学交流センター（仮称）」の併置と併せて、総会の決議を経、学術会議の第一次5か年計画の中の一部として、その設立を政府に勧告したのである（昭和41年5月23日・資料編109頁参照）。

1. 細胞生物学研究部（4部門）
 2. 同化代謝研究部（3部門）
 3. 発生生物学研究部（3部門）
 4. 生物調節研究部（4部門）
 5. 生物集団研究部（4部門）
 6. 客員部門（3部門）
- 計 6部 21部門

それをうけて学術会議内には、政府勧告された「生物学研究所および生物科学交流センター」の早

期実現をはかる目的で、設立準備委員会が設置された（赤堀委員会）。この委員会には、ひろく学会議の会員以外の研究者を加えた実行委員会（森脇委員会）とその W. G. とが附加された。そして予想される新研究所の名称としては、各委員の意見をもとに「基礎生物学研究所」というのが採用された。現在正式に認められている基礎生物学研究所（基生研）という名称のはじまりである。

設立準備委員会には、文部省の宮山平八郎氏等の御出席も願って、研究所設立の実現のための法制上の問題についてもいろいろ指導をうけた。そして先に述べた研究所名「基礎生物学研究所」の英名についても、一般研究者のアンケートも求めて、Institute for Biological Research などいくつかの名称が出されているが、この会では結局決定はしなかったようである。現在使用されている National Institute for Basic Biology はもっと後になって決められたものである。大学院問題については、研究者を教育の負担から解放しなくてはいけないとか、大学院をもつことで、研究テーマが小さく、不明確になるとかいった不賛成派と、所内の研究を新鮮に保つには大学院は是非必要であるという賛成派とののはげしいやりとりが行われている。そしてその後設立の準備が進むにしたがい、基生研はプロパーの大学院はもたないという線にしばられたのである。後に私の基生研所長在任中に共同利用研一般の問題としてこの問題が問題化して来た時、基生研としては、運営協議員の意見もまとめた上で不賛成を表明した。それは一つには準備委員会時代からの上記主張を簡単にかえることの見識をきらった点もあったわけである。しかし現実の問題としては、現在私の自身の考えも変っている。ごく少数の精鋭を大学院生として包含することは、postdoctoral fellow をもちにくい日本の現状からいって、研究上の活力維持のためにも是非とも必要なのである。

基生研の運営の方式についても、ずい分いろいろの討議がなされたのであるが、後に実現する三研究所総合といった問題はこの段階では未だ出てはいない。

昭和42年には後に岡崎総合研究所の一つとなった生理研についても「人体基礎生理学研究所」として学会議からの政府勧告が出た。分野としてはかなり近いところもある二つの研究所の準備委員会は、かくしてそれぞれの特色を主張しつつ、設立の早期実現を競う形になったのである。（人体基礎生理学研究所は間もなく生理学研究所となった）

学会議からは、その後続々と研究所設立の政府勧告が行われることになり、一時はそれらの中の生物科学にかかわる研究所の設立を促進する方途を検討する松尾委員会というのが学会議の長期計画委員会の中にもうけられることになったのであるが、討議の結果は時期尚早ということで個別研究所案を各分野で調整検討して早期実現をはかることが望ましいという結論に達せざるを得なかったのである。

このような情勢の中で基生研設立準備委員会は松尾委員会で討議された総合化案の内容なども参照しつつ、当面は個別研究所の構想で進むことになったのであるが、文部省の学術審議会の委員とも連絡しながら検討を進める中で、昭和41年5月に政府に勧告した案は生物学の全分野を含み、その結果として規模が大きすぎ、現実の問題としてこの研究所設立の実現は甚だ困難である点が指摘され、慎重に対策を考慮せざるを得なくなった。その結果基生研設立準備委としては、その内容を個体の生物学ということにとどめ、集団の生物学はこれを切り離して、別個に考えるより他仕方がないという結

論に到達し、基生研は個体を対象とする生物学の重点分野に集約することになった。そして重点分野としては、細胞生物学、発生生物学、生体調節（感覚行動を含む）が考えられ（固定部門8、プロジェクト部門5）、3年次計画という形になった。新構想の大筋はこのように決って、46年5月第2次の「基礎生物学研究所設立主旨および構想」のパンフレットを作った。

46年8月には、基生研設立準備委員会の赤堀委員長からこの段階に至っては研究の現場により近い人達によって具体的な活動をしていった方がよいだろうということで、委員長辞任の御申し出があり、事実上の準備委員刷新が行われ、新委員長は、当時都立大学長であった団勝磨氏にしまった。そしていよいよ研究所設立のための具体的な作業に入ろうということになったのだが、そうすると、所長候補をきめ、各部門の性格もはっきりきめて、部門の長の予定者をならべる必要があった。そこで最初からこの研究所設立に賛意と関心をもっていただいて来た各学会からの御意見もきいた上で、前委員長の赤堀先生と森脇教授とに所長候補をきめていただくことになり、私が指名されてしまったのである。これは大変なことになったのであって、早急に各部門の内容、設備の予想を立てて具体的な概算要求を立てねばならないわけなのである。とても1人や2人でやることではない。それで、私は各部門の教授候補と考えても夫々おかしくない方々を集めて諸々の調査にあたっていただくより他ないと考え、金谷君や古谷君の力も借りて実行委員会というのを作り上げ、私が委員長になって作業をすすめていただくことを団準備委員長の御了解も得て、ここに桑原委員会というのが出来上り、金谷、古谷両氏にはその幹部になっていただくことになった。この委員会はこれまでの諸々の委員会とちがって、きわめて実現性の強いものなので、皆本当に真剣であった。諸外国の事情をそれぞれ大使館にあたって調べたり、国内の大学その他の施設の資料集めも着実にやって基生研設立の緊急性をうきほりにすることもやらねばならなかった。そして47年12月には、46年5月の第2次案の改訂も作成して、学術審議会の理解も充分得られて、学術審議会から文部大臣に対し分子研、基生研、生理研の設立が適当であり、緊急性があるという報告が出されたのである。何かの席で時の奥野文相が、分子、基生、生理の三研究所を作りますと明言された時のことを私は忘れることが出来ない。

ところで研究所の設立には土地が必要である。各研究所ともこれを探し求めていた。国有地でなければしょうがないのである。そしてここではじめて文部省からこの岡崎愛知教育大跡地の話しが出されたのである。基生研では先にも一寸述べた通り、団委員会の一員として私もそれを見にいったのであるが、桑原委員会からも金谷、古谷氏他大勢の人達がそろって視察に出かけた。結局各研究所其他にこれ以上の場所は得られず、東京からの距離が遠すぎるといった事はあったけれども此の地を希望するかたむきが強まり、学術審議会からすすめられている三つの研究所を此の地に一緒に設置することも可能であるという見方が出て来たので、昭和48年の末頃には三研究所の創設地として愛知県岡崎市（愛知教育大学跡地 193,000m²）がきまり、49年分子科学研究所準備会議において同研究所の設置調査が三研究所の関連性を配慮して行われることになった。

昭和50年には分子科学研究所が岡崎市に設立されることになり、同時に岡崎基礎総合研究所の設置調査費174万円が計上され、岡崎地区基礎総合研究所調査会議（座長、名大名誉教授伏見康治氏）が設置された。私もその会議には加えられたのであるが、此の会議では基生研、生理研の設置について

の調査を行うと共に、分子研をふくめた総合研究所の設立を目途として調査が行われたのである。そして基礎生物研についていえば、現在みる通りの3研究系、7部門、6客員部門がまとめられたが、最初プロジェクト部門と称して、専任研究者にある重要プロジェクトを集中的に突進させるという部門は、そのような時限的な専任研究者の枠は不可能であるというところから、外部からの併任によってその目的を果す客員部門にかわった。各系の内容については設立準備委員会で考えて来たこととは別にかわらなかった。各部門は教授1，助教授1，助手2で、客員部門には教授，助教授は併任，助手2は専任ということで、此の客員部門の使い方が実際問題として工夫を要するという形になった。各研究部門の研究員の位置づけに国立大学の講座に準ずる職制を用いたのは、大学に準ずる研究の自由を確保する為に必要であったのである。単に研究員であると、官庁に所属する機関のように国政上必要な研究職として使われる可能性もあり得るから避けたのである。

図書館，エネルギー供給センター，電算器センター，共同研究員宿舎，廃棄物処理施設等は三研究所共通であるが，RIセンター，動物実験センター，分析センター，電子顕微鏡センター，工作センター，洗滌センター等は基生研生理研の二研究所共通といったような形である。

勿論各研究所の運営上の独自性は出来るだけ尊重されるべきであるが，三研究所をゆるやかに結合した総合研究機構を作り，共通施設の管理その他共通事務の処理のため，機構の長のもとに共通事務部をおくということについて，慎重な検討が行われたのであるが，此の時点で既に独立の出發をしていた分子科学研究所は基生研，生理研とは学問分野，研究の方法等を異にするからこれを一つの研究所にまとめるということには賛成し得ないとし，三研究所を一つの総合研究機構にまとめることは，人事予算等の面で自主的な運営にさまたげをうけるし，三研究所の総合化は設置場所が同一地域であるということから発生したものであるが，分子研は沿革からみて単独の研究所として設置構想をすすめて来たのであるから，総合化については十分に時間をかけて，検討する必要があるということで仲々意見がまとまらなかった。

そのようなことで，調査会議は，当初から三研究所による総合研究機構を設置するのは困難であるから，さし当っては基生研と生理研の二研究所による総合研究機構を発足させることが適当であるという結論となった。しかし各種の施設については共用を出来るだけ進めて，共通の施設については総合研究機構が管理を行うことが適切であるとして，その時点で計画中のものの中，共通施設と認められるものを指摘したわけである。

そして51年の5月10日には既設の分子科学研究所に総合研究機構調査室が出来，文部省の中にも便宜のためのせまい分室がもうけられ，室長金谷晴夫氏（当時東大海洋研助教授）以下室員5名がついた。そして同時に岡村総吾氏を座長とする岡崎総合研究機構調査会議が出發して，さし当って，基生研，生理研で構成する岡崎地区の総合研究機構の検討が進められることになり，暫定的にこれは生物科学総合研究機構調査会とよぶことになった。この調査会は多数の調査協力者から成り，組織運営専門分科会，研究設備専門分科会，施設専門分科会にわかれて作業した。

52年1月には生物科学総合研究機構の創設のための9億1,800万円という予算がつき，昭和56年度には分子研をふくめた新たな総合機構として再編成するということになった。それまでの間は生物科

学総合研究機構事務は分子科学研究所管理局で併せ処理するという了解が得られた。何の因果か知らないけれども、分子研の管理局に附属しているような形で、町の人には分子研に基生研と生理研とが附属で出来たとししか映らなかったわけである。まことに不愉快な出発であった。

かくして、兎も角国立学校設置法の一部を改正して、生物科学総合研究機構は創設され、分子研の所長選出の時の手続きに準じ、調査会の中に所長選考委員会がもうけられて、正式に私が所長に選任されたわけである。機構長は同じく調査会の中に機構長選考委員が出来て勝本保次氏が選任され、生理研の所長も同様にして内蘭氏に決定した。

このようにして出発した生物科学総合研究機構は岡崎の旧愛知教育大のキャンパスに残されてた唯一のコンクリート建築であった、旧図書館の建物を、分子研が改装して管理局と共に使用してきて、研究棟の一部がやっと出来て引移ったあとにそのまま入ることになり、管理局はこれも暫定的に新築の分子研研究棟内に移っていった。

2年前にぼうぼうの枯草を切り開いてこの建物の中で開店した分子研に比べれば、一応草も刈られ、窓のガラスも完全に入った建物に兎も角入れたことは感謝すべきであった。半地下の図書館の一部は水生動物飼育用の水槽を入れて飼育の室にし、機構長、と二所長の室をとり、会議室（評議員の会など）をシンポジウムの室にして、初年度金谷教授と神谷教授の研究室と生理研の方の先生方の室に最少限のスペースをとると、もう来年度赴任していただく方々の室にも、実験研究のための余地にも、どんどん搬入されてくるいろいろの実験器具や設備がつまこまれて、人の坐る場所もないくらいになってしまった。しかしその中で教官も第一年次にきまった人達はどんどん任官してくるのである。兎も角開設後の1、2年間スペースをどうやりくりしたか詳しくは私にはわからない。分子研の御好意で一部の物品を新しく出来た分子研の建物内に一時収納させていただいたこともあった。年毎に設備費はどんどんついて、建築の方はとても追いつかなかった時期があった。

研究所にとっては何といっても研究者の人事が決め手である。人事委員会は原則として、運営協議員の中から、所内外を問わず、適当な数名を選んで編成し、委員長をそれぞれきめて、自選、他選の応募者の中から選考する方法をとり、募集広告は広範囲の大学、学会ニュースなどに配布することにした。

応募の書類、業績論文は各委員に配布し、業績に関して手わけして精読していただくことにし、各人について数回の選考会をもつことが多かった。私はすべての選考会に参加させていただくことにした。初代の所長の任期中ではこれが一番の大仕事だったような印象が残っている。最後の段階では身柄をもらいうけに出かけたこともしばしばあったし、多くの委員長が全く公正な立場にたって親身の活動をして下さった事を私は深く感謝している。皆さんが大切な基生研の使命を重視して私心のない努力をして下さったということである。私にとってうるさかったのは無責任な周囲からの独断的な、羨望的な、全くおもしろくない暴言みたいな放言であった。それからたとえば地もとのマスコミなどがバイオテクノロジーの総本山といった期待で話をききにくることである。この説明は仲々むずかしくうっかりすると誤解を招き易いのである。先に述べた当研究所の設立への多くの研究者達の長い期間にわたる努力の根元は何だったか？エコノミックアニマルなどとはいわれたくない努力なのであ

る。バイオテクノロジーをさげすむのでは毛頭ない。当研究所は基礎研究所なのでありずっとそうではない。そのことは三研究所の要^{かなめ}々あってほしいと私は思っている。設立準備委時代から終始語り合い守るべき一線をたしかめ合ってきた金谷晴夫教授に所長室の鍵をお譲りして間もなく、氏が癌にたおれしまった事は、かえすがえすも残念であったが、それを立派にうけついで下さる現所長を得て私は安心して静かに発展を見守らせていただけることを10周年の何よりの祝詞として送りたい。

当研究所政府勧告が出された時から、「生物学研究交流センター」の設置がいわれており、それは最初に出来た研究所にくっつけて善処するということになっていたわけであるが、当研究所の出発にはそのようなものは、一切考慮されてはいない。十何年かたつ間に学界の情勢はかわっているので当時の状態では、生物物理といった分野が開けて来て、生物学者にとっては一種の勉強会の場が重要になって来ていたのであったが、今は生物学の大きな部分が既に方法論的には生物物理学的であり生物化学的であるという形に定着しているのである。それで本研究所が開設の年から実施している共同研究活動が充分意味をもっているし、現在、現所長の下で、トレーニングコースが考えられているようでもある。その他いろいろのシンポジウムには最大限の便宜をはかっており、大学院学生の依託もうけている。

私は今、最初に述べたように私にとっては20周年にも値する研究所の生立ちの感慨を述べればよいのである。現状と今後の夢とは、現所長の岡田さんにおまかせした方がよいと思う。

10周年お目出とうございます。心からおよろこび申し上げます。